

保育実践が学生にもたらす学びについての考察 —模擬保育の体験が与える保育に関する本質的気づき—

大 條 あ こ

キーワード：保育内容（健康） 実践 模擬保育 実習 保育者養成

1. 研究の背景

この30年間、平成という時代に日本の子ども達を取り巻く社会的環境は著しく変化した。高齢化、女性の社会進出、合計特殊出生率の低迷による少子化、未婚率、離婚率の増加、単身世帯の増加により、家族形態は多様化し、昭和時代に定型化されていた「核家族、専業主婦、子ども二人」という従来の家族形態のイメージは完全に崩壊した。また、長期の経済低迷、非正規雇用の増加、IT化、グローバル化により、社会構造自体も急激に変化し、子どもを取り巻く環境では児童虐待やいじめの件数も増加し、暗いニュースが絶えない。平成はある意味、子ども受難の時代であったとも言えるだろう。

今後、私達は、地球温暖化や災害の増加、AI社会の到来など、これまで遭遇したことのない未知の時代に突入するが、国はこれらの課題に対して、福祉的な支援を強化するだけでなく、教育面でも大きな変革を求められている。2012年中央教育審議会ⁱは、これからの時代の教員は、「豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力」を得ることが重要であると述べている。

大学の教員養成は、人材育成の観点からその役割は極めて大きい。2019年度、この流れを受けて、教職課程には新カリキュラムが導入された。新カリキュラムでは「主体的・対話的で深い学び」(中央教育審議会 2017)ⁱⁱの実現のため、アクティブラーニングを取り入れた授業を実施することが求められ、更に、今回は、各課程に盛り込むべき具体的な授業内容が、コアカリキュラムとして提示されている。そして、幼稚園課程も、幼児期が就学前の人格形成の基盤となることから、一層、注目されている。

本稿は、この新カリキュラム導入の意図に沿い、より良い保育者養成のために、筆者の担当授業である保育内容（健康）で実施した模擬保育において、学生がどのような力を得たのかについて、彼らの学びを振り返り、考察するものである。平成29年「幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究」ⁱⁱⁱでは、幼稚園教諭に求められる資質能力と教員養成段階に求められることとして、(1) 幼稚園教諭として不易とされる資質能力 (2) 新たな

課題に対応できる力 (3) 組織的・協同的に諸問題を解決する力の3項目が挙げられている。(尚、ここでは幼稚園教諭に限定されているが、当然、保育所や認定こども園の保育者養成にも求められるものである。) アクティブラーニングの手法を取り入れた模擬保育における学生達の気づき、学びはこれらにも繋がっていくものと考えられる。

2. 新カリキュラムで求められている実践性

今回、初めてコアカリキュラムが示された背景には、教育現場での実践性に大学は十分、寄与できていないのではないかという、過去なされた議論からの流れがある(高等教育専門教育課 2001)^{iv}。教員養成には学芸と実践性の両面が求められるが、これまでの教職課程では、教員は「教員としての特別な知識、技能を備える」ことより、「学問が十分にできることが教員の第一条件」として捉えられている傾向があった。

しかし今や、学芸第一主義では、実際に教育現場に立った時、社会の多様化、複雑化、価値観の変化に教員自身が対応できなくなっている。実践と知識の乖離が、教育現場の困難さを生じる一つの原因となっているのだ。幼稚園の場合、クラス運営は一人担任であることがほとんどなので、チームで保育する保育所と異なり、学生達は卒業後、研修を受ける時間も十分に無いまま、4月より子ども達の担任として、毎日、保育を進めていかなくては行けない。当然、周りの同僚のサポートを受けながらではあるが、技術や経験がまだ乏しい彼らにとって、それは決して簡単なことではなく、「担任制だから」という理由で、幼稚園を敬遠し、保育所を選ぶ学生がいることも最近の傾向として見られる。

そのため、教育職員免許法施行規則に規定する各事項に納まらない「総合的な資質能力」(総合教育政策局教育人材政策課 2019)^vを備えた教員の養成が早急に必要となり、コアカリキュラムが考案された。そして、複合的で複雑な課題に対して、創造的発想を持って解決法を見出せるよう、学生自身がアクティブラーニングの手法を用いた協同的活動の中で、連携しながら互いの意見を交換し合い、異なる価値観を受容する体験が求められている。

保育者養成では、実践性を育てる核となる科目が設置されているが、コアカリキュラムでも指定されている「保育内容の指導法」における模擬保育は、学生達が現場を想像しながら、それまでの知識を有機的につなぎ、総合的に応用することが求められる、正に実践のための授業である。模擬保育については既にその保育の実践力向上について効果があることが報告されており、体験による即応力の向上(上村 2013)^{vi}や、保育者としてのアイデンティティの確立(田爪・小泉 2006)^{vii}が報告されている。

筆者は拙著(大條 2018)^{viii}で、「保育内容(健康)」の模擬保育を分析し、学生達がそれまでに得た子ども理解や保育技術に関する個別の知識を互いにつなぎ合わせながら、どのくらい適切な保育内容を構築できるかを分析した。そして学生達は、ある程度、子どもの発達を正確に把握し、年齢に応じた保育内容を、子どもの心情に配慮しながら、考案することができており、一定の知識を実践に生かしていることが確認された。またそれらの

知識、技術の中には、実際の保育現場でも十分、有効と考えられる工夫が多々あり、レベルの高い内容も含まれていた。

3. 「保育内容の指導法」の模擬保育における実践性

筆者の前回の研究で明らかにされた、具体的な知識、技術を適切に組み合わせ、保育を構築していく力は、保育者がクラスを運営するうえで、最も必要とされる能力のひとつであるが、実際、現場に立つ際、保育者には別の技量も必要となってくる。というのは、保育現場は、常に刻々と変化し、一度として同じ状況は生まれないうえに、対象とする子ども達も一人ひとり異なり、多様だからである。従ってその「常に新しい」ケースに対応するためには、知識を直接的にではなく、より有機的に結び付けて、総合的に判断し、適切に対応する柔軟性が必要になってくる。今日、教職課程の学習形態において、アクティブラーニングが多く取り入れられているのも、まさに知識を超えて、どのように実際に、目の前にいる子どもの個々の状況に対応してくかという能力が問われているからでもある。

それらは、場を踏むことでだんだん身につく専門家の知恵、体験知につながるものであり、ある程度一貫性がある直観が働く基盤となるものであり、いずれ「子どもってこういうもの」「保育ってこういうもの」という、自分にとって腑に落ちる子ども観や保育観を形成していくものである。

松山 (2008)^{ix} は、「保育の実践力とは、様々な定義があるが、少なくとも保育技術のみを向上させることが実践力とはならないことは言うまでもない。」と述べ、「自分がどのような枠組みで子どもを見ているのかについて、自分で気が付かなければ、独りよがりの保育が展開されてしまう」と指摘している。様々な可能性を秘めている子どもの本当の姿を捉えるためには、自分が拵えた枠組みを打ち破り超えていく、新たな価値観の獲得や視野の拡大が必要である。

ショーン (2007)^x は、専門家は「行為の中の省察」により直観的に暗黙知を得るが、その後、更に「行為についての省察」により体験知を得ていくと述べている。保育者は実践の中で感じ、知恵を得ると同時に、その後、実践を反芻し、客観的に省みることで、自分の価値観の変容や視野の拡大を図ることができる。

そこで、本稿は、前回と違う視点からアプローチし、「保育内容の指導法」の科目「保育内容 (健康)」の模擬保育において、価値観の変容や視野の拡大につながるどのような本質的な気づきや学びを学生達が得たかについて考察する。

4. 目的と方法

目的：授業「保育内容 (健康)」の模擬保育の活動を通して、学生達の価値観の変容や視野の拡大につながる、本質的な気づきや学びを明らかにする。

方法：2017年度後期開講の保育内容 (健康) 模擬保育における学生の準備や発表の記録から学生の学び、気づきを抽出し、考察する。

授業内容：90分授業3回使用する。最初の2回で準備を進め、最終回で発表する。グループは6～7名で構成し、先生役を一人配置し、それ以外は子ども役を担う。保育中、トラブルが必ず2回起きよう設定する。発表終了後は、グループ間で互いの意見や感想を交換し、それを参考にしながら、グループ内で振り返りをする。

5. 結果

抽出された学生達の本質的気づき、学びは下記の3点である。

その1「子どもの保育活動の目的はチルドレンファーストであり、そのことをいつも意識することが大切。そのためにも一人ひとりへの子ども理解は欠かせない。」

学生達は、模擬保育を作る過程において、一貫して子どもの心情に思いを寄せながら、話し合いを進める姿が見られる。学生達は、構築の過程で、子どもが「楽しく」活動するためにはどのような言葉かけが効果的かを考えながら議論し、トラブルへの対応についても複数の対応策を出し、それが「保育者にとって」ではなく、「子どもにとって」どのような意味を持つかについて検討していった。振り返りにおいても、保育技術が、単に表面的にどのように影響するかのだけでなく、子どもの心情にどのように影響を与えたかにまで、想像を巡らす様子が見られた。

模擬保育の終了後、学生達からは、以下の意見が聞かれた。「発表では、ただその活動を進めるという思いになってしまいがちだった。「この遊びから子ども達にどんな力が得られるのか？」をいつも把握することが大切と感じた。」「主活動でこそ、全体を進めながら一人ひとりを観る力が必要。こういう言葉かけをしたら、子どもはどのような気持ちになるかも考えることが大切。」「全体を進めるうえで、個々の子どもに対応せずに流してしまうことがあるが、子ども自身が切り替えができるように、保育者がしっかり受け止め、個々に声かけをすることが、子どもの成長につながる。そのためにも、子ども一人ひとりの性格や特徴を理解することが必要と感じた。」「保育者はいつも見られている存在だと感じた。そのことをいつも念頭におき、子どもに与える影響を考えなくてはいけない。」「本番では、保育者役はこどもの発言をなるべく聞き逃さないようにしようとグループで決めた。」「実際のアドリブに対応するのは大変であった。男の子役が部屋から出て行ってしまった時には、何て声掛けをしたらよいか、困った。ゆっくり、リズムをつけて繰り返して話すことで、伝わりやすいように工夫した。」

学生達は、より良い活動を実現させるためには、子ども不在であってはいけないと感じたようだ。保育は、チルドレンファースト、子どもが生き生きと豊かな時間を過ごせることを常に中心において思考することが、第一義的な要素である。しかし、実際の保育実践においては、全体への指導が優先し、個々の子どもの心情が置き去りにされてしまうことも少なくない。今回、学生達が、子ども中心に考えることが、むしろ全体活動をより豊かにする、ということに納得し始めていることは、今後の実習実践においても良い影響を与

えるであろう。

その2「保育には、流動性や突発性がある。そのため、設定された展開でなくて良い。」

指導案というものはあくまでも「仮説」であり、実際はその場で子ども達の様子に合わせて変化してくるものである。従って、その流動性や突発性を含めながら保育を展開していくことが望ましく、実はそれが保育の醍醐味のひとつともいえる。

模擬保育では、事前におおまかな筋書を決めるが、本番では柔軟にアドリブを取り入れながら進めていく。そのため、展開を決めていたものの、実際は子ども役の学生が役になりきって演じることで、保育現場と同様に予想外の新鮮な場面に遭遇することがあり、その中で保育者役の学生は苦勞しながら、なんとか個々の子どもの心情をくみ取り、臨機応変に対応していこうとする姿が見られる。それらの状況から迫られ生み出された保育者役の言葉かけや工夫は非常にリアルであり、時に光る彼らのセリフや動きに、「こういう言葉かけや行動を自分も真似てみたい」と他学生が強い魅力を感じることもしばしばある。模擬保育において、学生達は、保育の流動性や突発性のある程度、疑似体験できており、その中で、自分が心惹かれる他学生の言動を自分のものにしようとする取奪の姿が見られる。

このように実際に体を動かして表現する模擬保育には、互いの意見に刺激を受けるだけでなく、互いの姿そのものから知恵を取奪し、多様性を学んでいく姿がある。他の人の姿から言語外のものも含めて吸収する取奪という行為は、保育者が現場で成長していくにあたって欠かせない要素である。汐見、大豆生田ほか(2018)^{xi}は、「専門性の高い保育者とは、多様な他者に対して身体が開かれており、共感的に関わり合い、お互いの方や行為を取奪し合いながら自分の見方や行為を「省察」することができる存在なのです。」と述べ、取奪と省察の重要性を指摘している。

実際の実習では、想定外の状況に臨機応変に対応することに対して、学生達は消極的であり、行動の選択は保守的になりがちである。その理由のひとつに、彼らは常に正解を求めてしまい、「保育は多様であっていい」ということが肚に落ちていないことが挙げられる。何をすべきかという発想に捉われてしまうと、保育者は、子どもの状況や思いを見落とし、適切な援助ができなくなる可能性があり、「子どものために良い保育を」という考えが、皮肉にも子ども不在の現象を生む。想定外の状況を適切に読み取るのは決して簡単ではないが、ここでは前述したショーンの「行為の中の省察」による冷静な視点と判断も必要となってくるだろう。

終了後、学生達からは以下の意見が聞かれた。「保育現場では同時にいろいろなことが起こっていると感じた。トラブルには、即対応することが大切。そのためには、子どものサインに気づくこと。」「子どもはいつの間にか、何かをしていることが多い。保育者が把握できない事態がいつの間にか起きていた。子どもの興味を引くことも大切だが、全体を見るのが必須である。」「トラブルへの対応方法はあらかじめ決められない。解決には、

子どもがその場で生み出す力が大きく左右すると知った。」「トラブル時、自分で解決しようとするのではなく、子どもの意見を聞くこと、また代弁することが大切と感じた。そして見守り続けることも時には必要。見守ることにより子どものイライラや不満が治まることも多い。保育者の言葉かけにより、その場で子どもは受容されているように感じていた。」「指導案通りにいかないのはやっぱり常である。先を見通す力が必要。しかしその通りにならないとしても、解決策を練っておくことで、安全で楽しく活動が行える。」「保育には流れがある。心の中で慌てていても、周りにばれないことが大切。』

学生達は自分たちが想像していたより、場面、場面で多くのことが起きていることに気づき、そんな時には、活動を無理に進めるのではなく、その状況の展開に委ねながら、進めても良いことに気づいている。

その3 多様性は保育の魅力であり、それは子ども、保育者それぞれに見られるものである。

子ども役の学生達は、たいいてい保育現場で実際に出会った子ども達をモデルにし、その子ども達の様子を真似て演じる。学生達の設定した子ども達の性格は実に多様であり、例えば、いつも先生にくっついて、ひたすら先生にしゃべり続ける子どもに、先生が苦心する場面もあった。学生達は他のグループが演じるリアルな子どもの姿を見ると、「そうそう、こういう子どもいるよね?」と互いに共感し合いながら、いろいろな子どもがいるということを再確認していた。

模擬保育には、子どもの様々な姿だけでなく、先生自身のその人らしさが反映される魅力もある。似たようなトラブルであっても、先生の性格により、言葉かけや関わり方も大きく異なってくる。前述のその2で指摘したように、同じ状況であっても同じ解はなく、先生の選択や表現は多様であって良いということに、学生達は気づき始めている。

実際の幼稚園の実習においても、学生達は、おっとりした先生のクラスの子供達はおっとりしており、活発な先生のクラスの子供達は活発であることに驚き、同学年でありながら各クラスに教員の多様性が反映されていることに気付く。

終了後、学生達からは以下の意見が聞かれた。「個性豊かな子ども達。子どもを横一列に見ないことが大切と感じた。」「子どもは一人ひとりそれぞれのペースも違うし、得意不得意もあることを感じた。」「遅れた子どもに気づく力、対応する力が必要である。」「こどものトラブルはけんかだけでなく、いろいろな状況があるとわかった。」「声のかけかたは一通りではない。今回、いろいろなパターンの呼びかけの技術を吸収できた。」「先生が魅力的な保育をするために、保育技術がなぜ必要かわかった。』

学生達は、子どもと子ども、子どもと保育者という、個性がそれぞれある「人と人との組み合わせ」によって、そこに固有の場が生み出されることを感じ、その表現も多様であって良いことに気づき始めている。

6. 考察

今回、模擬保育の実践を通して、学生達が保育に関して、どのような本質的な気づき、学びを得ているかに注目したが、学生達は、「子ども一人ひとりを大切にすること。」「子ども主体の保育に努めること。」「子どもの様子をしっかりと見て、柔軟に対応すること。」「子どもの多様性を受け入れること。」「保育者自身にも多様性があること。」に気づいた。

今回のこれらの気づきは、テクニカルな側面だけではなく、体験に基づく洞察によって得られたコンセプチュアルな知であること、また実践を通して「腑に落ちた」という感覚として実感を伴って得られたことに大きな意味があると考えられる。なぜならこの特徴に支えられた気づきは、より安定した一貫性のある知であるため、今後、彼ら子ども観や保育観の形成に十分寄与していくことが推測されるからである。

レナード、スマップ (2005)^{xii} は、どのように経験が専門家の深い知恵 (ディープスマート) を生むかを分析しているが、深い知恵 (ディープスマート) は、直接の経験に基づく迅速なパターン認識である直観でもあり、その後、その人の信念と社会的影響により形作られることを指摘している。直接体験から得た「腑に落ちた」洞察は、それが活動の中であれ、活動後であれ、今後、本人の信念と社会的影響により、これまで形成してきた枠組みを修正したり、変容させたりしながら、より一貫性のある安定した専門家としての知恵に繋がっていく可能性がある。そしてそれらは今後、保育のある場面で何かを決断しなくてはいけない時の判断の基盤ともなり、直観による本人の潔さや柔軟性や応用力をも引き出すと考える。

7. 今後に向けて

模擬保育の実施は、どのように保育の知識や技術を個別のケースの実践に生かしていくかを体感的に学ぶだけでなく、ある一貫したコンセプチュアルな知を得る機会となり、それは刻々と変化するケースに対応する決断力や柔軟性を養う可能性がある。刻々と変化するケースに対応することは、どの対人援助職にも見られる大変さであるが、同時に醍醐味でもあるだろう。

保育理論を学ぶと学生達は「保育はこうでなければならない」という思いに捉われがちだが、今回、学生達が自分の想像以上に、保育実践において柔軟さや自由さを保証されていることに気付いたことは、今後の実習において、生き生きと実践力を発揮するためにも有効であろう。そして実践の魅力を再発見したことは、保育職への意欲向上にもつながるだろう。

今、保育職は離職率が高いことが課題となっており、新人保育者がやりがいを感じながら、成長していけるかが重要な鍵となっている。保育教諭養成課程研究会 (2017)^{xiii} は養成段階から新人、中堅、リーダーへのキャリアステージにおける成長過程の指標を示したが、養成段階で求められる「子供が好き」という気持ちから新人保育者の「実践は面白い」という次の段階への移行を垣間見ることが出来る学習機会として、保育者養成校にお

ける実践性を養う科目は、重要な役割を担っている。今後も実践の面白さや豊かさに学生が気づくような授業内容を工夫していきたい。

注

- i 文部科学省 HP 中央教育審議会 2012 「2 これからの教員に求められる資質能力」『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申)』
- ii 文部科学省 HP 2017 「中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ」『「新しい学習指導要領の考え方」』
- iii 文部科学省 HP 2017 「2 幼稚園教諭に求められる資質能力と教員養成段階に求められること」『幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究』
- iv 文部科学省 HP 高等教育専門教育課 2001 「Ⅱ 今後の教員養成学部果たすべき役割」『今後の国立の教員養成大学学部の在り方について』
- v 文部科学省 HP 2019 「教育職員免許法等の改正と 新しい教職課程への期待」『平成 30 年度教職課程認定申請に関する事務担当者説明会』
- vi 上村昌 2013 「保育者養成段階における保育実践力の向上に関する一考察 (2)」『高田短期大学紀要』第 31 号 pp.79-88
- vii 田爪宏二・小泉裕子 2006 「保育者志望学生の「保育者アイデンティティ」確立に関する検討ー模擬保育の実践を通してー」『鎌倉女子大学紀要』13 号 pp.27-38
- viii 大條あこ 2018 「保育者を目指す学生の模擬保育「身体を使って遊ぶ活動」における気づきと実際の学び」『桜美林論考「教職研究」』第 3 号 pp.1-9
- ix 松山由美子 2008 「保育者養成における「保育実践力」育成のためのカリキュラムの構成と評価」『四天王寺大学紀要』第 46 号 p.234
- x ドナルド・A・ショーン 2007 『省察的实践とは何かープロフェッショナルの行為と思考』鳳書房
- xi 汐見稔幸 大豆生田啓友編著 2018 『保育者論』ミネルヴァ書房 p166
- xii ドロシー・レナード、ウォルター・スワップ 2005 「経験知を伝える技術 ディープスマートの本質」
- xiii 文部科学省 HP 一般社団法人保育教諭養成課程研究会 2017 「幼稚園教諭・保育教諭のための研修ガイドー実践の中核を担うミドルリーダーの育成を目指して」p.10